



支援母船「よこすか」

支援母船「よこすか」は有人潜水調査船「しんかい6500」の母船です。人を乗せて水深6500mまで潜水できる「しんかい6500」の運搬や整備、支援をしています。そのために、「しんかい6500」をつり下げることができるクレーンや、整備を行う広い格納庫があります。また、「よこすか」は深海巡航探査機「うらしま」の活動も支えています。そのほかにも海底の地形を調べて「海底地形図」をつくる海洋調査の仕事も行っています。



最新のハイテク機器で「しんかい6500」をバックアップ。

「よこすか」には「しんかい6500」をサポートするためにさまざまな設備が整っています。大型のクレーンや広い格納庫、「しんかい6500」と通話するための音波を使った通信機や画像の受信機など、ハイテクの機器が積み込まれ「しんかい6500」の行動を管理する司令室の役割を行います。



有人潜水調査船「しんかい6500」



重さ約26トンの「しんかい6500」を吊り上げる巨大なAフレームクレーン



音響画像伝送装置により、「しんかい6500」のカメラがとらえた映像が静止画として船上に送られる



「しんかい6500」を収容する格納庫



船底部の音響航法装置の送波器(手前の2つ)と水中通話機の格納式のソーナードーム



深海巡航探査機「うらしま」

「しんかい6500」を支え、深海のナゾを解明する

「しんかい6500」と世界の海洋で深海調査に活躍。

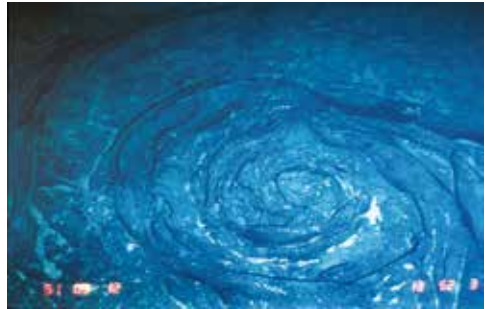
これまで「よこすか」は「しんかい6500」とともに世界の海洋で深海調査を実施し、優れた成果を達成してきました。大西洋では活発な熱水噴出域(TAG熱水マウンド)の活動を詳しく調査し、インド洋では世界で初めて有人潜水調査船による潜航調査を行い、太平洋の東太平洋海嶺では、世界最大の海底溶岩流を発見しています。2013年には、インド洋、南大西洋、カリブ海、そして南太平洋をおよそ1年かけて巡る「QUELLE 2013」を実施しました。もちろん、日本の近海においても、日本海溝、伊豆・小笠原海溝、南西諸島海溝などの深海調査で多くの成果を挙げています。また、東日本大震災における潜航調査では、地震による深海生態系への影響、海水中の化学変化、海底の変動を調べています。



東北地方太平洋沖地震震源海域での有人潜水調査船「しんかい6500」による潜航調査。水深5351mで見つけた海底の亀裂。幅、深さともに約1m。亀裂は南北方向に走り、少なくとも約80m続く。



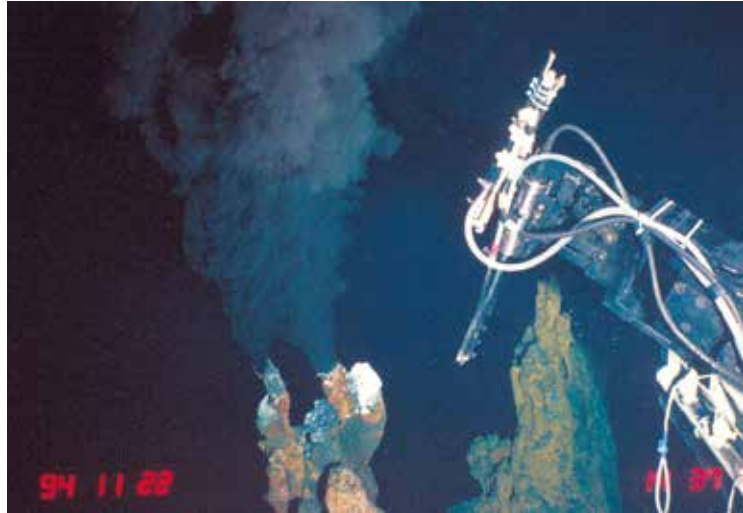
ババニューギニア沖にあるマヌス海盆のバックマヌスサイト。黒い熱水、ブラックスモーカーが吹き出しています。



「しんかい6500」が日本周辺以外で初めて潜航したのが北フィジー海盆。この一帯は海底から流れ出した溶岩流が固まり、独特の景色を作り出しています。



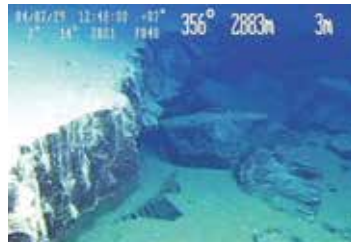
インド洋中央海嶺で発見した鉄のウロコを持つ巻き貝「スケリーフット」



東太平洋海嶺の巨大ブラックスモーカーでマニピュレータで熱水を採取している様子。



大西洋中央海嶺の巨大なTAG熱水マウンドのブラックスモーカーに群がるエビ。



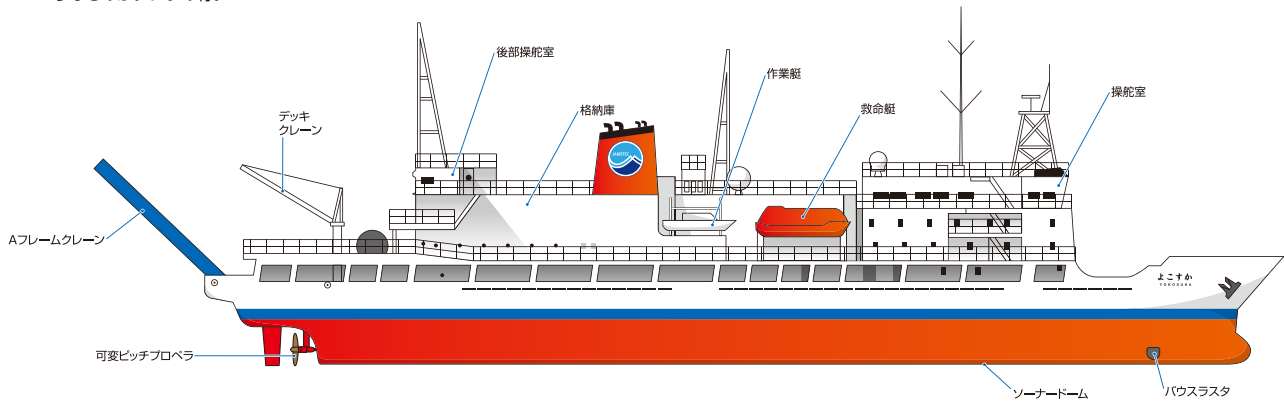
2004年の「NIRAI KANA」の調査で発見された世界最大級の海底溶岩流。



1992年、水深4036mの鳥島海山の調査中に発見した鯨骨に形成された生物群集。白いブロックのようなものがクジラの骨。



カリブ海ビーヒ熱水域のリミカリス・ハイビサエが群がるチムニー。



主要目	竣工	1990年	喫水	4.7m	定員	60名(乗組員45名/研究者15名)
	全長	105.2m	国際総トン数	4,439トン	主推進機関	ディーゼル機関 2,206kW×2基
	幅	16.0m	航海速度	約16ノット	主推進方式	可変ピッチプロペラ×2軸
	深さ	7.3m	航続距離	約9,500マイル		

